



ペーチ駅。

7. ホッローケー

シュタディオ・バスターミナル

7時半から朝食を摂り、朝食後フロントで宿泊料を清算する。最初の2泊が20,800Ft(7,640円)で、追加した後の1泊が7,850Ft(2,883円)で、だいぶ安い。ブダペストでも追加の方が安かったのも、このことをいうと、彼女は、「だから今度は直接予約して。」という。

Booking.comの手数料が結構高いのかもしれない。

8時半に宿を出て徒歩で駅へ向かう。多少曇っていたものの、気持ち良く歩ける朝だった。9時ちょっと前に駅へ辿り着いた。古めかしいが威風堂々とした建物だ。ブダペストとペーチ間の鉄道が開通したのが1882年で、当時の建物かもしれない。ちなみに東海道線が新橋、神戸間で開通したのは1889年だった。

前日に鉄道情報収集をして Pécs 9:14 Budapest 12:04 などを書き込んでおいた用紙に First Class を赤ボールペンで書き加えて窓口に出した。ブダペストまで228キロの乗車券が3,950Ft(1,451円)で、IC列車なので座席指定券が必要となり、これが505Ft(185円)だった。

これまでハンガリーの座席指定列車には二度乗っているのですが、大体要領も判ってきた。指定券に印刷された列車番号を探してホームに行く。ところが当該番号の列車には、はっきり2nd Class の表示がされている。

発車まで時間があつたので出札窓口へ戻り、先ほどのメモを見せながら抗議した。そもそもこのような間違いを防止するために用意したメモながら、その役割は果たせなかった。しかしそれでも、「云った。」「云わない。」みたいな口論にならず、こちらとしては自信を持ってやり直しを主張できた。

窓口にいた中年女性職員は恐縮しながらも手早く処理してくれた。料金はカードを使用していたので、新しく発券された指定券の金額欄には差額の990Ft(364円)が印字されていた。

改めて指定された席へ行くと、中年婦人がノートPCを使用中だった。別にその席に固執するつもりもなかったが、ブダペストからジュールへの列車で超満員経験したこともあり、ともかく指定券を彼女に見せた。彼女はすぐ頷いて席を替わってくれる。ノートPCを使用するために電源のある席に坐ったので、多分移動先も彼女の指定席ではないのだろう。しかしこの日は3割程度の乗車率だったからそのままブダペストへ着いたようだ。



上:1等車の車内。下:一応座席はリクライニングシートになっている。

ブダペストの主要バスステーション

- ・ネープリゲト・バスターミナル
ドナウ川以西、国道4号線、5号線、51号線、
高速道路5号線沿線、ペスト県の町村方面
- ・シュタディオ・バスターミナル
ハンガリー東部方面
- ・アールパード橋・バスターミナル
エステルゴム方面
- ・ウーイペシュト・ヴァーロシュカプ駅前
センテンドレ、ヴィシェグラード経由エステル
ゴム方面など。

天候もまずまずで、列車の窓ガラスも(外国にしては)比較的綺麗(透明)だったから、車窓風景を楽

しみながらの列車旅となった。一度通った路線であり、おまけに終点まで行くので乗り過ごす心配もないから、ハンガリーにおいて、一番寛いだ気分移動する。三時間弱で定刻の12時4分ちょうどにブダペスト・デリ(南)駅に到着。

今日これから向かおうとしているのはブダペストの北東70キロに位置するホッロクー村で、公共交通機関はバスのみが利用可能だ。以前ブダペストの観光案内所で訊いたときはネープリゲト・バスステーションと教えられたが、インターネットであれこれ調べているうちに、正しくはシュタディオ・バスターミナルと判明した。デリ駅からは地下鉄2号線で乗り換えなしで行くことができる。

地下鉄も4回目なので、かなり余裕で乗ることができた。シュタディオ駅の一つ手前、デアーク広場駅で降りて地上のブダペスト東駅へ行く。ルーマニアへ行く夜行寝台列車の切符を買うためだ。当日買おうとして満席だったら路頭に迷うことになる。

国際線切符売り場は、主要プラットフォームを挟んで、国内線切符売り場と対称的な位置にあった。窓口発券機(切符購入、問い合わせなどのボタンを押すと番号の印刷された紙が発券され、順番に呼び出されるシステム)が備えられていたのに、気付かずに空いている窓口直行してしまった。

ルール違反だったが、混雑していなかったためか咎められることもなかった。ブダペスト発ブクレシュティ行きの夜行列車は数本あるので、予め用紙に第一希望から第三希望まで①②③を頭に書いて書きだして置いた。しかしこの作戦はあまり上手く行かず、こちらの意図を説明するのに返って手間取ってしまった。それでもとにかく午後7時10分発のブクレシュティ行き1等個室寝台券と乗車券51,930Ft(19,073円)を入手し、カードで支払う。

切符購入を終えてシュタディオ・バスターミナルへ向かう。地下鉄に再度乗るのが億劫で、「一駅ならばさしたることはあるまい。」一応以前入手したブダペスト市街平面図を瞥見し、1キロくらいと見積もって歩き出した。生憎なことに小雨がぱらつき始める。20分歩いても着かないので沿道にあった(多分)軍隊の門衛に訊いてみた。やはり間違いはないが、そもそもそんなことを尋ねたのは気分的に参っているからで、大したトラブルでもないのに恥ずかしいことだと反省。

結局半時間弱で地下鉄シュタディオ駅に辿り着いた。実際の距離は2キロ近かったのだ。駅には着いたものの、バスステーションが何処か判らずさらにうろうろすることになる。もともと働きの良い方ではないが、この時はその働きが著しく低下していたようだ。

それでも何とか地下にあるバスステーションを探し出し、予定していた3時15分発の切符(約90キロ)1,860Ft(683円)を買うことが出来た。



車窓風景。上:ペーチ近郊(10キロほど)。下:ソーカイ村付近(ブダペストまで鉄道で130キロほど)。



バス切符売り場。

ホッと一息ついたところで、急に空腹感が湧き上がる。バスの発車時刻までは2時間近くあるから、時間潰しも兼ねてゆっくり食事を摂りたい。しかしターミナルならば飲食店もそこそこあると思ったが、スタンドや屋台は沢山あるものの、酒を飲みながら落ち着いて食事できるような店は見当たらない。



上左:カフェ・イプシロンの外観。上右:広々とした店内。
下:スパゲティ・カルボナーラ。

「昼食抜き」も一応覚悟したものの、とにかく時間はあることだし、坐ってただ待つのも芸がない。東駅から辿ってきた道筋には飲食店はおろか商店もなかった。ならばとこの通りと交差するハンガリー大通を北へ向かってみた。広大なバスステーションに沿って進む形になり、ステーションの北端辺りまで行きそろそろ諦めようと思った。その時前方のY字路交差点向こうに二階建ての建物があり、屋根の上にレストランの看板が見えた。

交差点を渡って近付くと、テラス席もあり、店の内外で百人ぐらい収容できそうな意外に大きな食堂だった。逆風が収まり、そよ風にせよ追い風に替わったようだ。半地下の店内に先客は中年男が一人、ソフトドリンクのグラスを前に置き、書類に目を通していただけだった。ウェイターは二人いて、その一人が英文お品書きをテーブルに置いてくれる。

カフェには品揃えが豊富だ。しかしそれほど凝ったものを食べたいとも思わず、前日食べ損なったパスタにする。スパゲティ・カルボナーラとグラスでハウスワインの赤を注文した。

ワインを飲みながら待っていると10分ぐらいでカルボナーラが運ばれてきた。スパゲティがちゃんと茹でられていたことを考えるとかなりの手早さだ。エンダイブやリーフレタスのあしらいやバルサミコ酢と蜂蜜を煮詰めたものでの飾り付けなどは洒落たものだが、私の好みではない。しかし味は普通に美味かった。時間潰しも兼ねてのんびり食べる。

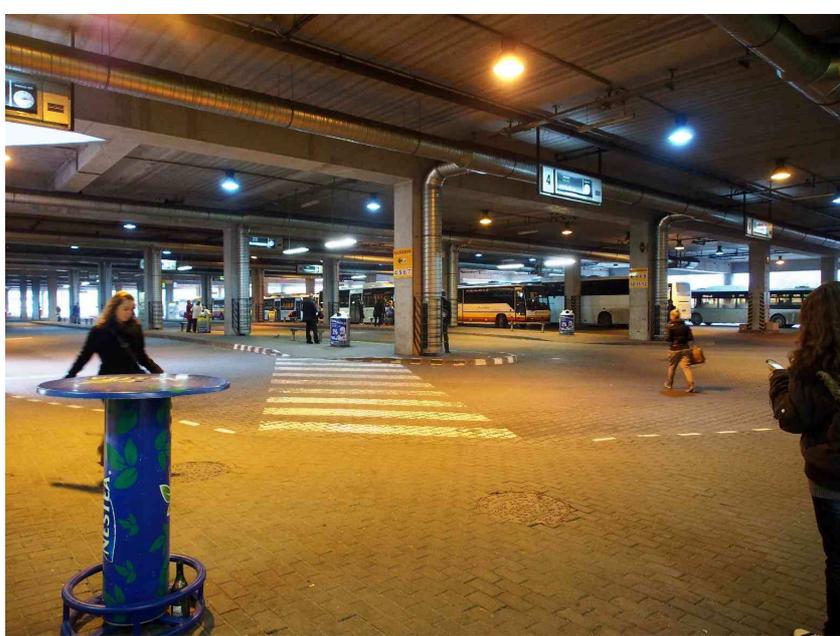
最後は今回もカプチーノで締めて、半時間強の昼食を終わりにする。料金はカルボナーラ1,600Ft(588円)、ワイン400cc1,000Ft(367円)、カプチーノ380Ft(140円)。

バスステーションへ戻り、待合室の隣にある売店でポテトチップ110Ft(40円)を買い、後はひたすら3時15分を待った。



バスステーションの電光掲示板。

定刻10分前に到着した大型バスに、先頭集団で乗車する。三々五々乗客は続き、定刻に発車したときには八割方の乗車率だった。市内を20分弱走る間に二箇所停留所がありほぼ満員になる。間もなく高速道路M3号線へ乗り入れ、快調に距離を稼ぐがこれも半時間ほどで終わり、高速道路を降りてからは、2、3分間隔で停留所があり、乗降者も多かった。



バスステーション全景。

小雨は降り続き、辺りは暮色に包まれて行く。新たに乗車する客はなくなり、停留所ごとに乗客は減少して行く。結局7分の延着で終点ホッローケーのバス停に到着し、此处で降りたのは私一人だった。現在地は英ガイドの地図に示されたバス停の位置とは微妙に違うようだ。折良く通りかかった少女に宿のアドレス(バスの中で泥縄ながら英ガイドからメモホルダーに転記)を示すと、英語は話さない子だが、すぐ判り説明しはじめた。しかしたまたま彼女の目的地と同じ方向だったこともあり、バス通りからの分岐点まで案内してくれる。

目指すトゥガリ・ゲストハウスのあるラーコーツィ通りを行き、そろそろかなと思ったところで、灯りの点いている民家の呼び鈴を押す。顔を出したのは若い男と愛想の良い大型犬二匹で、目指す宿は通りの斜向かいと判明したが、「いま電話してオーナーを呼び出してあげる。」と親切な申し出だ。

話が付いたようなので彼に礼を述べ、宿の庭に設けられた木戸で待っていると、5分ほどでオーナーのアダムがサンダル履きで現れた。握手を交わすと彼が先に立ち部屋に案内してくれる。内

廊下はなく建物に沿って作られた幅1メートルほどのデッキから部屋に入るようになっている。3番目の部屋だった。

ドアを開けると、彼は裸足で室内に入り、ざっと内部の紹介をしてくれた。彼の自宅から此处へ来る近道は未舗装道路のため靴底に泥濘が着いてしまう。それを室内に持ち込まない配慮がサンダル履きだったようだ。

次ぎに朝食を摂る場所に案内してくれた。棟の一番奥で5坪くらいの台所に、四人掛けテーブルが二つ置かれている。ドアには施錠しないから、冷蔵庫や電子レンジ、トースターなどは自由に使って構わないとのことだ。若干饒舌な傾向はあるが、私程度の英語力でも判りやすかったし、気さく



上:トゥガリ・ゲストハウス外観。下:泊まった部屋。いずれも翌朝撮影。

で初対面にもかかわらず気の置けないところは好感が持てた。

再び寝室に戻り、インターネットに接続するためのWiFi情報を教えて貰う。最後に、「何か問題があったらこの番号に電話してくれ。」と、彼の手造りらしいホッローケー観光情報パンフレットに記載した携帯電話番号を教えると去っていった。

一人になり落ち着くとようやく前後の事情が判る。ペーチでフロントの女の子に予約を頼んだとき、彼女が電話であれこれ訊いて、こちらが用意した宿泊要点メモに書き足してくれたのは要するに、「宿は無人なので、着いたら電話すること。管理人の住む場所は50メートルばかり離れたところで、住所、名前、電話番号」などだった。ところが独自にインターネットで調べた村の案内ページに、「トゥガリ・ゲストハウスは通訳なし。」と書かれていたので、電話するのは最後の手段と思い込んでいた。会ってみれば淀みなく、しかしネイティブのではない判りやすい英語を話すアダムが管理人だ。そして英ガイドを読み直せば、「オーナー夫婦のアダムとトゥンデは宿を始める前、ロンドンで働いていた。」から英会話に問題はないといったことが書かれていた。以前にこのことは読んでいたものの、後からのインターネット情報にかき消されてしまったようだ。

ともかく列車とバスの移動に加え、暗闇の中で宿を探す緊張から解放され、晩酌を始めることにする。アダムの話だと、村のレストランや食堂は午後6時に閉まるそうなので、宿に着いた時点でほぼ時間切れだった。昼飯を抜かなかったことや、ポテトチップを買い込んだことは正解(幸運)だったし、酒の手持ちとその他の多少のツマミを持参しているのはしてやっつりの気分だった。

ホッローケー逍遥

翌朝は雨こそ上がったものの鉛色の雲に覆われ、霧も少しばかり立ち籠めていた。昨晚の打ち合わせで朝食は8時からとしていたので、少し前に台所兼食堂へ行って待つ。ほぼピタリの時刻に、アダムが食料を入れたバスケット二つを下げ姿を現した。

テーブルの上にバスケットから取り出したものを置きながら、「村の主な見所はほとんど閉まっているはずだが、希望する場所と時刻を言えば電話して開けるように頼むから、大丈夫だ。」とのこと。事前調査をしすぎると、現地でものを見たときの新鮮さがなくなっていると思うので、見たい場所を訊かれても取り敢えず思いつくものはない。

その代わりにWiFiが上手く繋がらないことを云うと、「後で私のノートPCを貸してあげよう。」と云うことになった。彼の出勤時にPCを寝室まで持ってきてくれるそうだ。



朝食は地味だが充実していた。



食後しばらくして、PCを受け取ったが、これもあまり通信の調子が良くないし、仮に繋がっても日本語が上手く行かない。

色々試行錯誤した結果、借りた無線LANアダプターから(本来は自動インストールされるはずのソフトを)手動でインストールし、何とか繋がるようになる。それでもスピードが遅かったり、接続が途切れたりするので、センサー(アンテナ)部分を窓の外に出しておくことにした。

この状態でメールをチェックする。13通受信していたが、フェイスブックなどが主で、重要なものは一つもない。しかし重要なメールなどまず来ないのは常日頃のことだし、それよりも海外にいても誰かと繋がっていると云うことは気分的に落ち着くものだ。

話が前後するが、アダムがノートPCを届けてくれたとき、人形博物館を見られるよう手配を依頼した。私自身はあまり人形に興味を抱いていないが、かつて母がコレクションしていたこともあり、アダムの手造り観光案内で人形博物館を紹介していたのを読み立ち寄る気になった。

彼は早速携帯電話を取りだし、(多分)博物館管理人と交渉を始めた、10時半で良いかと私に確認し、交渉成立。彼はそのまま出勤したようだ。どこに職場があるのだろうか？

しばらく部屋で情報収集にいそしんだ。インターネットでブダペストからブクレシュティへの夜行

寝台列車の使用体験をブログなどで読んでみる。それほど心配することもなさそうだ。見極めが付いたところで装備を整え外出する。10時ちょっと前になっていた。

気温は9℃だったけれど無風で湿度が高いせいか寒さは感じない。宿のあるラーコーツィ通りがバスの通る街道と交差するところにバス停があり、風除け程度だが待合設備もあった。一応時刻表を確認し、メモ代わりに1枚撮影した。

付近は変則的な四差路で、そこから坂をちょっと登ったところに食品店らしい看板が見えた。酒が切れているので此処で買える見通しが付いたのは有り難い。しかし時間がないので購入は後回しにする。

村の一本道を人形博物館の方へ歩き出してスピードライト(フラッシュ)を持参し忘れたことに気付いた。博物館の中は暗い可能性が大だから、実際使用するかはともかくあった方が良さそうだ。急いで宿へ引き返し、このロスタイムにより、約束の10時半に遅れそうになる。小走りで村の中を博物館へ向かった。



上: バス停。右側に見える梁と白壁が待合設備。
下: 村の中心部。中央部に見える教会は塔部分が木造。



人形博物館全景。右側に停車中の四輪駆動車が管理人の車。

博物館の傍らに四輪駆動車が止まり、博物館の入口に老人が佇んでいる。ぎりぎりだけれど遅刻はせずに済んだ。既にドアは開けられており、入ってすぐの階段を登る。ちなみにホーロックー独特の建築様式はバローツ様式と呼ばれ、白い壁は泥と藁を混ぜたものに石灰を塗って作られている。外観は2階建てのようだが石造りの

半地下室の上に木造の平屋が載っている。博物館の人形はこの平屋部分に陳列されていた。

階段を登ったところに小さなカウンターを備えた受付みたいなものがあり、老人は中に入り入場券を売ってくれる。撮影料が300Ftで合わせて600Ft(220円)支払った。

陳列スペースは入る前に想像していたものの半分ぐらいで12坪程度だろうか。前面にガラスを張ったケースは三段になっていて、その各段にあまり隙間を置かず人形が並んでいる。

ハンガリーの各地から集められたとのことで、ハンガリー人で人形



ハンガリー各地から集められた人形達。

に興味があれば面白いのだろうが、どちらにも該当しない私としては、老眼を凝らしたり眼鏡を掛けるなどの気にはならない。漫然と見て行くのを老人は黙って見守るだけで、それでも時折私が見ている対象を、「この地方の人形だ。」などと解説してくれる。

こちらにしてみればどこから来た人形でも良いのだけれど、せっかくの好意に無反応も申し訳なく、頷きながらシャッターを切ったりした。しかし真面目に撮影していないので、今となってはその画像がどれなのか、さっぱり判らなくなっている。

展示数も限られていたし、こちらの興味はそれ以上に限られていたので、10分ほどで観覧を終了したが、私一人のために開館して貰ったことを考えるとただちに立ち去るのも心苦しかった。幸い入口カウンターと並んでちょっとした土産物を買っている。そこで女兒が使うようなカチューシャ二つとネックレス一つを買った。値段は全部で3,950Ft(1,451円)。管理人に礼を云って博物館を出る。



白壁にゼラニウムが映える。



バローツ様式の破風部分の木製飾り格子は家紋のような透かし彫りで、各家ごと独自のパターンを持っている。装飾的な意味と煙抜きを兼ねる。

村を貫いているコシュート・ラヨシュ通りを歩いて家並みを見物する。この村が世界遺産に登録されたのは1987年でブダペストと共にハンガリーとしては最初だった。現在の登録名は、「ホッローケーの古い村落とその周辺」で、現存する村が登録された最初のケースらしい。

「ハンガリーで最も美しい村」との評価には必ずしも賛成できないが、古くからのものが多く保存されている点で貴重な存在だとは思う。これは地味が悪かったためずっと貧しく、鉄道や幹線道路も近隣になかったことに加え、貧しさゆえに共産主義政権下での集団農場化しなかったことも大きいらしい。文化的に貴重であることが歴史的に見たとき住民の幸福とは必ずしも一致しない例だろうか。

世界遺産登録エリアに含まれるコシュート・ラヨシュ通は僅か800メートルほどなので、のんびり眺めながら往復してもさほどの時間はかからなかった。復路の中ほどで、城遺跡に通じる小径を示した道標を見つけた。遺跡もさることながら山林の間を曲折する山道が魅力的に思われた。

世界遺産登録エリアだけあって、径は良く整備されている。多少勾配が急だと石段が築かれていたり、未舗装の箇所でもぬかるんで歩きにくいような所は皆無だった。ゆっくり登って10分強、標高が60メートルほど上がった高台に13世紀に築かれた城の廃墟が霧の向こうに浮かび上がった。



典型的バローツ様式の民家。村全体が斜面に立地するため、地下1階が石造りの倉庫で1階が木造漆喰になっている。

城の入口に設けられた鉄格子のゲートは施錠されている。中には一応簡易博物館などもあるらしいが興味はなかった。しかし櫓から見下ろす景観は素晴らしく、村全体も一望できるらしい。これを見逃したと思えばちょっと残念なところだが、しかしこの霧では村の辺りはほとんど視界の外だったとも思う。



城遺跡。



城から下る未舗装車道。



バローツ様式風の公衆トイレ。

しばらく城の周辺を歩いてみたが、霧が晴れる様子もなければ、誰か登ってきそうな雰囲気もない。来た道を引き返すのもつまらないし、未舗装だが車道があるので、「多分村に繋がっているだろう。」とこれを下る。5分ほどで舗装道路に、それからさらに5分で乗用車50台くらいの容量がある広い駐車場に出た。世界遺産登録地域を巧みに避け、村や城からさほど遠くない位置を駐車場にしたのだろう。しかし今は一台の駐車もなかった。

コシュート・ラヨシュ通りに戻ったのは11時20分頃だった。昼飯にはまだ早く、沿道の民家を見比べながら進み、ついでに昼飯を摂れそうな所を探した。この通り沿いには三軒の食堂があった。バス停に近い方から、コトリン・チャード(キャサリン・イン)、ムスカートリ ヴェンデーグレー(ゼラニウムの居酒屋)、ヴォー・エッタラム(城食堂)で、一軒目は表示からすると営業日だがドアは閉ざされ、二軒目は休業の表示、三軒目は営業中だったが(渋いのではなく)くすんだ感じが意に染まなかった。

コシュート・ラヨシュ通りの見物を終え、「ひょっとしたら時刻が早過ぎるので、もう少しすれば開店するかもしれない。」と、淡い希望を抱きつつ一旦宿へ戻った。あれこれ時間潰しの後、1時近くになって再出発する。



村で出会った犬と猫。友好的な子が多く、特に犬は愛想がよい。

相変わらず城食堂しか営業していない。昼食抜きにするほどの毛嫌いではないので、ともかく入った。内部の感じは予想よりも良い。ウェーターがマジャール語、ドイツ語、英語併記お品書きを渡してくれる。

スープはなしで、鹿肉のローストにコロッケだけをメインにし、ハウスインの赤をグラスで貰う。ワインを飲みながら待っていると20分ほどで鹿肉が登場した。ローストと云うより煮

込みみたいな感じを受けたものの、食べてみれば美味しい。しかしそれ以上に感心したのがメニューの一部とは知らなかったミックス・ピクルスサラダで、これは見た目を裏切る味わいだ。特に若干甘味のある漬かったキャベツが美味かった。これもザウアークラウトの一種かもしれないが、かつて経験したことのない味だった。

1時間弱の食事はこの日もカプチーノで終わる。勘定は鹿肉2,300Ft(845円)、ワイン200cc 3杯1,500Ft(551円)、カプチーノ350Ft(129円)、合計4,150Ft(1,524円)だった。

しばらくコシュート・ラヨシュ通りを散策し、愛想の良い犬と交流したりする。最後に食品店により、ウォッカ1,943Ft(714円)とやつまみ用のハム207Ft(76円)を購入。後は真っ直ぐ宿へ帰った。

インターネットのブッキングコムでブクレシュティの宿を予約した。街の中心部に位置する四つ星ホテルで、(当てにはならないが)宿泊者の評価も高かった。二泊の料金117€は四つ星を考えれば安いような気がする。ルーマニアの物価が安いと云うことならば、旅人としては有り難い。

夕方になり携帯電話で管理人のアダムと支払いに関して打ち合わせる。結局翌朝支払うことになった。

8. ブダペスト(2)

フォアグラ缶詰

明くる14日は晴天が戻ってきた。前日と同様8時に食堂で待っているとアダムがバスケットを下げ姿を現した。勘定書は後で寝室の方へ持ってくるそうだ。前日にインターネットでトゥガリ・ゲストハウスのホームページを閲覧し、彼の姓が Kiss と知り、面白いと思った。そこでこのことを尋ねると、マジャール語では Kiss は小さいを意味するそうだ。ちなみに午後になって、ブダペスト東駅のコインロッカー種別表示にこの語を発見しなるほどと思う。



上左: 店内。上右: 来店したときは出されていなかった路上看板。
下左: 鹿肉のローストとコロッケ。下右: ピクルスサラダ。



ツマミのハム。